

9月

【収藏品紹介】
小野藻波著『盆栽法秘訣』

（隆文館発行 明治40年）

本書は、盆栽の培養法について書かれた書籍です。培養法については、従来の盆栽関連書籍と類似していますが、巻頭の緒言に盆栽事情についての記述があり、当時の盆栽像が良くわかる貴重な資料です。



小野藻波著『盆栽法秘訣』
（隆文館発行 明治40年）



緒言

緒言では、「元來盆栽といふものは、僅か寸尺の草樹を、浅い小陶磁器の盆裡に植えて、其自然の趣即ち天真の風致を楽むものであることは言ふ迄もない。」と書き出し、「盆栽と植木鉢」の項では、次のように著者の盆栽観を示しています。「世人往々盆栽と鉢植とを同視して居る者が多いやうに思はれるが、これは多少の区別をしなければならぬ。」として、世の中では盆栽と鉢植えが同一視される傾向であったことがわかります。一方で、著者はこれらを区別する必要があると主張しています。どのような区別かという点、「鉢植と云へば（中略）草樹で唯花を愛し葉を称美するものが多い」のに対して、「盆栽に至つては鬻（う）き（に）記載した如く、根幹枝葉に至るまでも心を用ひて、「此の浅い盆裡」に、斯くの如き大きな樹木がよく生育せられて居る。」と云つたやうに仕立てるのが、所謂盆栽の盆栽たる価値とする処である。」と述べています。著者は、単に花や葉を楽しむものが鉢植えで、根から葉先まで気を遣い、

大木のように樹木を表現するものが盆栽であると定義しています。これは、過去に本誌で紹介した盆栽関連書籍（『家庭園芸花卉と盆栽』明治44年刊、2022年6月号掲載など）と同じ盆栽観です。著者がどういふ人物なのか、現時点では判明していませんが、少なくとも盆栽を愛好していたと考えられるため、本書が刊行された明治40年頃には、盆栽愛好家の間では著者が言うような、現在にも通じる盆栽観が定着していたようです。本書は盆栽培養法の普及書であることから、鉢植えと盆栽が混同されている世間一般の人々にも、この盆栽観を浸透させようという意図があったと推測できます。また、緒言の最後には、「各（おの）の嗜好する処の異なるは勿論であるけれども、之を大別して、関東及び関西の二つに区別することが出来る。関東における盆栽は、その以前盆石箱庭等から脱化した物で、関西は鉢植の変化である。故に木の好み植え方に対する土の盛り方鉢の好み等に自然差異を生ずるは（歌）やむを得ざることである。」と述べています。現在、盆栽の成り立ちについて多くの研究があり、一般には、江戸時代末期に京都や大阪で盛んになった煎茶文化に

表 盆栽関連書籍に記載されている樹種の順番

書名	著者	刊行年	樹種別に記載がある目次名	最初に記載されている樹種	松の記載がある順番	真柏の記載
盆栽名称一覧	鈴木鐸郎	明治15	—	菊	なし	なし
盆栽手引種	三戸與彰	明治16	培養の仕法	梅	16番目	なし
草花木竹盆栽培養法	岡本半溪	明治27	草木仕立方の事	梅	13番目	なし
草木図解盆栽培養全書	井口松之助	明治29	草木仕立方の事	松	1番目	なし
同上			盆栽雅賞之部	松	1番目	なし
同上			盆栽俗愛之部	松	1番目	なし
実験果樹草花盆栽接木培養図解	安達吟光	明治32	盆栽雅賞草木の部	松	1番目	なし
同上			尋常盆栽花木の部	黒松・赤松	1番目	なし
草木実験盆栽仕立秘法	中島信義	明治35	草木盆栽仕立方の事	松	1番目	2番目
小物盆栽実験集	春基園主人	明治35	落葉せざる木	松	1番目	なし
盆栽法秘訣	小野藻波	明治40	草樹盆栽の栽培法	松	1番目	2番目

において文人木が見られ、明治時代にそれが東進して東京に伝わり、江戸時代以来の鉢植え文化に影響を与えたとされています。対して、著者は、そもそも関東と関西で異なる系譜であると主張しています。その根拠の有無を含めて調査する必要がありますが、盆栽観が確立されたという時代の人々が、このように認識していたという事実は、盆栽の歴史を研究する上で示唆に富むものと言えます。

更に、緒言では、「先づ松柏の二つを以て其の王位と定めてある。」といい、松と真柏が、主要な盆栽であると考えていたようです。表は、本書以前に刊行された盆栽関連書籍に掲載されている樹種の順番をまとめたものです。これにより、明治30年頃から松が一番目に掲載されるようになり、松が主要な盆栽として位置づけられるようになってきたという傾向が窺えます。真柏については、明治35年頃から書籍に登場するようになり、本書では真柏盆栽の歴史を紹介しています。要約すると、以下のとおりです。真柏が盆栽として登場したのは明治時代からで、嘗て東京では「伊吹」（ヒノキ科ビャクシン）に似た「信州栂」（長野産の真柏）があったが、樹齢が若く、姿が盆栽向き

でなかったため人気がなかった。しかし、本書刊行より10年前の明治30年頃から、「伊予栂」（愛媛産の真柏）が流通し始め、盆栽愛好家の目に留まり、植木屋や盆栽園が集まる団子坂にあった「勲風園」が熱心に紹介し、人気を博して真柏という名前が付いた」ということです。真柏の歴史については、本誌の2009年7月号の特集で紹介されており、真柏盆栽の盆栽界への登場は明治20年頃で、明治後半には真柏が人気になった一方、主な産地であった四国石鎚山では産出量が少なく、明治終わりには採り尽くされ、新たな産地を探した結果、糸魚川真柏が発見されたことが知られています。本書の記述によって、伊予の真柏が流通する前は東京で信州の真柏があったことや、伊予の真柏の流通が明治30年頃であり、盆栽関連書籍に記載されるようになる時期とも一致していることなど、今まで知られていなかった真柏盆栽の始まりと流行史の一端を補うことができ、重要な資料です。

明治時代の盆栽観や真柏の歴史について引き続き研究を要する部分は多々ありますが、これらをより明らかにするうえで、本書は貴重な資料と言えます。

（正）館主事 立石見雪